

●特集●

災害における子どもと保育

火山列島である日本国は、中国、インドネシア、イラン等の国と共に、地震大国と言われています。それと同時に、台風大国でもある我が国は、豪雨と洪水災害にも頻繁に見舞われます。最近の主な自然災害を振り返っただけでも、2014年8月豪雨、2014年御嶽山噴火災害、2016年熊本地震、2017年九州北部豪雨、等を挙げることができます。子どもの成長と発達の中で、最も幼い発達段階を対象とする保育関係者が、災害時にどういう行動を取るべきか、被災後の保育をどう再開するか、日頃の防災訓練をどのように進めていくか等は、非常に重要な問題です。本号では、「災害における子どもと保育」を主題に、実践と経験に基づく原稿を寄せて戴きました。

災害にかかわる研究を 保育実践に活かすために

清水 益治

「21世紀の保育をつくる会」と称して、私たちは2001年頃から民秋言先生（白梅学園大学名誉教授）の下に集まって研究をしてきた。この研究会の大きな特徴は、専門分野が様々であるため学際的でありながら、『保育所保育指針』をはじめ、保育にかかわる制度に詳しいメンバーが集まっていることである。現在も、西村重稀先生（仁愛大学名誉教授・元厚生省保育指導専門官）、千葉武夫先生（聖和短期大学学長）や吉岡眞知子先生（東大阪大学副学長）、成田朋子先生（名古屋柳城短期大学名誉教授）などが忙しい仕事の合間を縫って会合を持っている。

この研究会が災害研究に着手したのは、震災直後、2011年5月のことであった。こども未来財団から、児童関連サービス調査研究等事業として研究費を交付され、「保育所の災害時におけるマニュアルに関する調査研究」を実施した。その後、2013年には同財団の助成により「放課後児童クラブの災害時におけるマニュアルに関する調査研究」、2013年から2015年には、科学研究費（課題番号25516022）を得て「幼稚園・保育所・認定こども園における災害に対応した人的システムに関する調査研究」を行った（いずれも代表者は千葉武夫先生）。さらに、2016年には、明治安田こころの健康財団の研究助成を得て「災害時におけるマニュアルに関する調査研究—児童養護施設における災害マニュアル実態調査及びマニュアル作成のための手引きの策定—」も実施した。保育に関して、我々が得た主な結果は、次の3点に集約できる。

①マニュアルが作られていないことが多い。地震災害に対するマニュアルは、約9割の園が整備しているが、豪雨、洪水、暴風、津波は、5割以下の園しか整

備していなかった。②整備していたとしてもマニュアルの内容が不十分である。朝夕など職員の人数、午睡時など保育の場面、子どもの活動、配慮を要する子ども、災害の規模や程度に応じたマニュアルになっていなかった。③災害に関連するサイトや資料を見る経験が、マニュアルの整備や、その内容の充実につながる。例えば、「気象庁の震度データベース」や「地方自治体の防災マニュアル作成の手引き」を見たことがあると答えた回答者の園は、ないと答えた回答者の園よりも、地震災害に対するマニュアルが整備されている割合や、配慮を要する子どもに対応したマニュアルになっている割合が高かった。

私たちは、この研究で得た結果を、制度に反映させることを目指している。幸い、放課後児童クラブの研究は、放課後児童クラブ運営指針に「災害等の発生に備えて具体的な計画及びマニュアルを作成し」と記述された。また、2017年3月に告示された新しい『保育所保育指針』にも「火災や地震などの災害の発生に備え、緊急時の対応の具体的内容及び手順、職員の役割分担、避難訓練計画等に関するマニュアルを作成すること」と明記された。

研究は、それ自体に目的があるが、その目的の達成で終わってしまったのでは、十分とは言いがたい。事実の発見だけでは、物足りない。研究費を交付された団体や、貴重な時間を割いて調査に協力してくださった方々に申し訳ない。災害にかかわる研究であれば、なおさらである。研究を社会に還元するための1つの手段が、成果を制度に反映させることであると信じて、これからも研究を続けていきたい。

●Profile

清水 益治（しみず ますはる）
帝塚山大学 教授

研究テーマは、子ども・保育者・保育制度の発達。子どもや保育者の発達については、何かを学び成長する過程や、そのメカニズムが知りたいと思う。保育制度の発達（発展）については、何が制度を動かすのか、その原動力は何か、制度が動く仕組みに関心がある。

“OMEP JAPAN KODOMO Fund” による福島保育フォーラム開催から みえてきたこと

上垣内 伸子

2011年3月11日の東日本大震災と、それに伴う放射能災害は、世界中の保育者・保育関係者にとって心痛み、かつ看過できない出来事であり、今もなお、その関心は福島に向けられている。殊に、チェルノブイリ原子力発電所事故による放射能被害を体験したヨーロッパの関心は、非常に高い。OMEP日本委員会は、支援のためのKODOMO Fundを立ち上げ、国内外からの寄付（現在までに385万円、うち海外からは1500米ドル）によって活動している。支援のスローガンを「こどもを支える保育者を支えよう」と定め、保育教材などの物的支援と、福島に集い語り合うことを通しての精神的支援、その声の世界への発信に努めている。中心は、「福島保育フォーラム」であり、郡山市と南相馬市の幼稚園、保育園を会場に6回開催してきた。OMEP世界大会では、研究発表やワークショップ、シンポジウム、報告パンフレット配布などを通じて、情報発信を続けている。ここでは、福島保育フォーラムからみえてきた放射能災害下の保育課題が、時間の経過に沿ってどのように変化してきているのか報告する。

第1回保育フォーラム（2012年3月、郡山市）では、保育の原点に戻る体験であったと語られた。まず、保育者が取り組んだのは、一人ひとりに対して安心感を生み出す信頼関係をしっかりと作ることであり、次に今生かせる環境や資源を最大限生かすことと、遊びを通しての再生を支えることが確認された。第2回（2012年8月、郡山市）には、不安状況の長期化によって新たに生じてきた課題に、どう向き合うかが語られた。震災前との子どもの行動の違いに目が向けられ、子どもにとっての危機的体験は発達段階によって異なるものであり、継続的長期的な追跡が必要と確認された。第3回（2013年3月、郡山市）には、2年が経過して放射能に対する保護者の意識の差が生じ、養育観の違いも顕在化したことで、保護者間、保護者－保育者間の人間関係構築の難しさが増していることが取り上げられた。第4回（2014年3月、南相馬市）は、津波と放射能災害により避難所生活を強いられた地域で開催した。震災当初の避難生活下では、生活リズムの保持と身体的な健康の維持という生きる土台となる部分を保障することが重要であったと語られた。また、放射能被ばくの恐れよりも、そこから派生した精神的な問題、家族関係の問題の方が大きくなっている現実が指摘された。第5回（2015年3月、南相馬市）では、自然との分断や制限の中で遊びこむ経験が得がたく、「遊びがやせた」という発言に胸を打たれた。保育者不足の中、保護者の不安や生活困難にも向き合う保育者の疲弊感が訴えられた。第6回（2017年2月、南相馬

市）では、園内外の自然環境を自らの手で整える努力により、自由遊びの重要性、自然や戸外の遊びが何物にもかえられない価値をもつことが実感されたと語られた。一方、強い不安感を持ち続ける保護者の割合は変わらず、積極的に行動し始めた保護者との意識差が広がり、保護者対応や保育内容の選択の難しさが増していることも確認された。

時間経過によって軽減するのではなく新たな問題・課題を生み出すという保育と子育ての現状を支えてきたことで、地域における園の役割の重要性に対する保育者の意識は、震災直後に比べてより強くなってきている。それを受け止め、これからも世界に発信していきたい。

●Profile

上垣内 伸子（かみがいち のぶこ）

十文字学園女子大学 教授

OMEP日本委員会 理事（世界幼児教育・保育機構はユネスコの下部団体のNGO。幼児教育を通じて世界平和に寄与することを目的とし、世界80カ国に国内委員会がある）

生活を基盤とした遊びの展開、ESDとしての幼児教育の在り方に関心。

2019年夏のOMEPアジア会議準備中。

豪雨災害から子どもや職員を 守るために

中野 晋

2017年7月5日午後1時20分、福岡県朝倉市付近で1時間に約110mmの雨が観測されたとして、記録的短時間大雨情報が発表された。この日、朝倉市では計7回の記録的短時間大雨情報が発表されている。この結果、複数の河川が氾濫して、道路網が寸断され、保護者が迎えに来られなくなったため、朝倉市内の4つの保育所で子どもと職員が一夜を明かすこととなった。こうした事態は保育所だけでなく、小中学校2校でも生じているが、この災害で命を落とした子どもがいなかったことは幸いである。気象庁はこの大雨を2017年九州北部豪雨と命名したが、近年、このような集中豪雨による洪水被害が頻発している。

豪雨災害に対する安全管理体制の整備は、地震災害と同様、避難行動支援の必要な子どもを預かる保育所にとって喫緊の課題である。特に、保育所では就労家庭の子どもを養護・教育しているため、大雨警報等の気象警報が発表されていても休所・休園することはほとんどない。2016年に鬼怒川が氾濫して市内の約半分が浸水した常総水害でも、午前2時20分に避難指示が出された地区にある保育所では、「自宅保育ができない場合には保育の受け入れが可能です」と連絡した上で、午前7時半から8名の子どもを受け入れた。しかし、園舎が平屋建てであったことと午前8時半頃には保育所周辺の浸水がひどくなってきた。そのため、午前9時に保育所の向かいにある民家の2階に避難し、

その後、ヘリコプターで救助されており、洪水時の危機管理の難しさの一端を示している。

東日本大震災では、行方不明者も含めて犠牲者が18,000人を超えた。保育所関係では岩手県、宮城県、福島県の東北3県で行方不明者も含めて114人の子どもが犠牲になっているが、その内111人は迎えに来た保護者に引き渡した後に津波に巻き込まれるなど保育所の管理外で起こっており、保育中に犠牲になったのは宮城県山元町の3人のみとされる（河北新報、2011年10月4日）。保護者へ引き渡した後の子どもの命は保護者が責任を持って守ることになるが、保育所でも子どもと保護者が帰宅中に危険にさらされることのないよう周辺の被害状況をできる範囲で情報収集し、場合によっては保護者も一緒に避難してもらうことも含めて、子どもの引き渡しの判断を慎重に行うことが必要であることを意味している。

2017年6月に水防法が改正され、保育所などの避難行動要支援者利用施設は、水害時の避難確保計画の作成と避難訓練の実施が義務付けられた。浸水エリアに位置する保育所では子ども、保護者、職員などの人命が失われるような深刻な被害が起こる前に、異常気象時の避難や降園についての判断基準を整理していただきたい。さらには、休園ルールについても自治体の指導のもと、各保育所で検討することが望ましい。また、周辺の被害状況を知ることや避難時の協力を得るためにも日頃から地域の方との協力関係を構築することも重要である。

【参考資料】河北新報：焦点／保育所、津波襲来で明暗／犠牲少なく、毎月避難訓練で備え。2011年10月4日。

●Profile

中野 晋（なかの すずむ）
徳島大学環境防災研究センター センター長
専門は地域防災学、危機管理学、南海トラフ地震や豪雨災害に対する防災・減災対策、特に学校、高齢者福祉施設、児童福祉施設など避難行動要配慮者利用施設の防災と業務継続対策を最重要なテーマとして取り組んでいる。
平成28年防災功労者防災担当大臣表彰受賞。

災害時の保育を考える —熊本地震から—

犬童 れい子

繋がりの中で（保育士の専門性が生きる）

すべてが非日常的になった時、私たちはどうやって子どもを守り、保育を再開すべきでしょうか。今回の熊本地震では、多くの課題を突き付けられました。あまりの大きな被害に、ただ唖然となりながらも、一方では、とっさに何かせねばならない使命感を受けて、同じ熊本県の仲間たちでニーズ調査に奔走しながらボランティア活動を始めました。後になって振り返る度に、火事場の馬鹿力とも言えるべき勢いで、よくぞ動いた、いえ、動けたと思うのです。

この使命感の動機付けとなったのは、先に震災の経験をもつ東北の保育士仲間の励ましと、全国保育士会という大きな組織の繋がりの中でいただいた、「私たちはこういう時にこそ、手をつないで子どもの幸せのために頑張る仲間です。だから何が必要か、どうしてほしいのか、いつでも伝えて。必ず応援するから」というメッセージでした。不安の只中にいた時、これは、大きな盾でした。

保育に携わる者として、震災後の子どものストレスや心の傷、または普段の生活と違う環境の中で健全な保育環境が奪われている現状に、心が痛みました。今どんな支援が出来るのでしょうか、何が必要とされているのでしょうか。実際に被災地に足を運び、その現状で感じたことは、その子どもに携わることの必要性和、少しでも笑顔で元気に過ごして欲しいという思いだったのです。

見切り発車ではありましたが、ボランティアの呼びかけ、それに直ぐに応え実際に動いてくれる県内の仲間がいたことで、私たちは、最も大きな被害にあっている地域で保育所保育のボランティア（3園へ50名）や日曜日の親子の遊び場「保育士村」（6回）を開催できたことに感謝しています。

子どもを支えることが保護者支援に

「保育士村」開催中、遊びに没頭している子どもの母親に話すチャンスがありました。「毎日大変でしょう？テント村はどうですか？」と声を掛けると「保育士と書いてあったから安心して来ました」と言われ、現状を淡々と話し出されました。「子どもが落ち着かなくなったこと、先が見えないけれど、何かしないといけないと思っています」の言葉に、今後の不安の大きさを感じながら、自分たちの無力さも感じました。それでも、この場に保育士という言葉に惹かれて来られたことを思うと、どんなことが出来るかということだけが支援へ繋がるだけではない、安心感を与える存在としてのあり方も必要であるとも思われたのです。

子どもが、そこで没頭して遊ぶ場があることに何かホッとされたり、自分の心の内を少しだけ出されたり、緊急の場の保護者支援になったりしたら、本当に有り難いと思いました。

保育の力

保育現場は、常に子どもの表情や保護者の雰囲気から、様々なことを察知して、臨機応変に対応していくことが、日常となっています。それは言うまでもなく、一人ひとりのおかれた状況に合わせて考えていく力です。災害時には、この臨機応変さが、保育者の普段とは違った意気込みとなって表れ、子どもを守るための頑張りにつながったと思います。

誰に強いられてでもなく、「出来る人が出来る時に出来ることをしよう」と呼び掛けた最初のボランティアへの手紙がありました。皆が一様に怖い思いをした災害の中で、それでも動ける人が率先して「出来るしこ」（熊本弁で「無理なく出来る分」）動き、それがあ

る園の保育の少しの支えになり、時には親子のホッと
する場になったこと、繋がり合い、協力してくれた保
育者たちの心意気を嬉しく思っています。

●Profile

犬童 れい子 (いんどう れいこ)
小羊保育園 副園長・主任保育士
キリスト教保育月刊誌へ「心にとめて」「実践を読んで」に年2回継続執筆中。
共同研究として、「子ども理解と保護者支援及びパートナーシップ、保育者
同士の相互理解と協働を生み出す保育発信システムの構築に関する実践研
究」を行っている。

避難訓練から見えてくること

樋口 和子

東日本大震災後、様々な事態に備えられるよう、防
災マニュアルを見直した。さらに、第一避難場所であ
る保護者駐車場には、防災倉庫を設置し、備蓄品や災
害グッズ等を保管するようになった。これは、宮城県
亘理町の保育関係者からの震災当日の保育所の子も
達の話の窺い、「災害に備えていかなければならな
い」、そして「災害から子ども達を守らなければなら
ない」と強く感じたからだ。また、それと同時に、日
頃の避難訓練の重要性を改めて強く感じることでし
た。

当園では、様々なケースを想定した避難訓練を毎月
1回以上実施している。また、年に1度は、消防署の
方々による防火指導を兼ねた避難訓練を行い、多くの
職員が消火訓練を体験している。子ども達は、消防車
や救急車の見学をしたり、防火指導のDVDを鑑賞し
たりしている。地震の時は、近くにあるもので頭を守り
丸くなる、転倒する恐れのあるものから遠ざかる、そ
して、「おさない、かけない、しゃべらない、もどら
ない」という意味の「お・か・し・も」という大切な言
葉をみんなで再確認している。

災害発生時の第二避難場所は、近くの小学校体育館
となっている。昨年の2月には、子ども達と職員で第
二避難場所である小学校体育館に向かい、職員が保護
者役となり、「災害時引き渡しカード」による引き渡し
訓練を行った。小学校までは、約800メートルあるが、
途中、信号のある大きな道路をひとつ渡る。0、1歳
児は避難車で、2歳児以上は徒歩で向かった。そして、
各担任は、出席簿、緊急用品、救急キット、災害
時引き渡しカード等の入ったリュックを背負い、その
他の職員は、重要書類やパソコンの入ったリュック、
防災グッズの入ったスーツケース2個等を持ち、子
ども達を誘導しながら歩いた。わずか800メートル程の
道のりであるが、普段とは違い、長く感じられた。ま
た、当園では、裸足保育を行っているため、道中を履
きなれていない上靴で歩いたため、途中、子ども達は
上靴が脱げたり、つまずいて転んだりしていた。

この避難訓練から、いくつかの課題や改善点が見え

てきた。まずは、2歳児は徒歩で向かったが、第二避
難場所への避難の際は、避難車の方がスムーズである
ことである。すぐに避難車を購入することにした。次
に、裸足保育を行っているために、避難用の上靴が歩
きにくいことである。そのため、地震の訓練の際に
は、防災頭巾だけでなく、必ず上靴を履き、第一避難
場所へ避難するようにし、上靴に慣れていく必要があ
るということに気付いた。また、火災の際には、上靴
を履くことなく、直ちに第一避難場所へ逃げることに
なるため、もし、第二避難場所まで避難する際には、
第一避難場所上で上靴を履く必要がある。このことか
ら、防災倉庫にも上履きを備蓄しておくこととなっ
た。最後に、子ども達と職員が安全に避難するため
には、クラスを超えての言葉の掛け合いや助け合い、協
力が大切であること等が、避難訓練後の職員会議にお
いて、話し合われた。

来年度には、第二避難場所である小学校体育館に、
保護者の方に迎えに来てもらい、引き渡しの訓練を行
う予定である。これは初めての試みであるので、また
課題や改善点が見えてくるだろう。子ども達を守ると
いうことは、あらゆる災害を想定した避難訓練や、保
護者や地域の方々を巻き込んだ訓練を行うこと、地域
のコミュニティ作りを進めることが、私達、保育関係
者には求められていると言える。

●Profile

樋口 和子 (ひぐち かずこ)
社会福祉法人若宮会 幼保連携型認定こども園おりーぶの森 園長
新島短期大学、東京成徳短期大学 非常勤講師
2016年度に保育所から認定こども園に移行し、保育所保育に40年間携わっ
てきた。0歳児保育を利用する母親の保育所支援や、こども園に集う利用者の
支援について研究している。また、働きやすい職場環境にも力を入れている。

今問われる想定外災害への備え

吉田 茂

「ゆれがまだつづいていますよ～。ゆれがまだつづ
いていますよ～。…」

3年前のある秋の日の朝のこと。私は職員室にいた
のですが、廊下から男児のこんな声が聞こえてきまし
た。私は、その声を聞いて思わずクスッと笑ってしま
いました。

なぜなら、その前日は、毎月行われる避難訓練の日
で、男児の言葉は、私が訓練時にマイクでアナウンス
する(訓練では実際に揺れていないため)言葉だった
からです。私は、すぐにその様子を見ようと廊下に出
てみると、1歳児から3歳児までの子どもたちが、男
児の先ほどの言葉を聞きながら(もちろん遊びとして
ではありますが)身を伏せていたのです。さらに、
その男児は、ダンボールでできた救急車を横に置き、
「みなさん、こんにちは～!」と挨拶をしたり、そのあ
と消防車や救急車の説明を他の子どもたちにしていた

り、とにかく面白かったのです。この時、子どもたちは、避難訓練まで遊びにするのだと感心し、私は、当時の園だよりに、このエピソードを載せました。

これまで、訓練等で子どもたちに伝えていた「地震」でしたが、2016年4月に起きた熊本大分地震は、子どもたちに本当の地震を教えることとなりました。深夜に起こった本震は、大分市で震度5弱を記録しました。直後に大分市は、災害対策本部を設置し、避難所も開設されました。夜が明けるとすぐに、当園の被害状況を確認したところ、幸いにも被害はなく、保育は行えると判断し開所しました。

熊本県益城町は、震度7を記録し被害も甚大でしたし、また大分市の隣市である別府市は、震度6弱を記録しました。それらに比べると、大分市においては、被害は、少なかったように思っていたのですが、登園してきた保護者に話を聞くと、自宅マンションに亀裂が入った家庭や、また自宅の天井にヒビが入り一晩を車の中で過ごした家庭もありました。そして、多くの子どもたちが不安な一夜を過ごしたとも聞きました。そのことを聞いて、私は、心を痛めたのと同時に、今後しばらくは、気を抜けないという緊迫感が、私の心を支配したのを覚えています。そこで、当園職員と対策を検討し、当面職員は、保育中（開所時間中）常に避難バッグを背負って保育する、また室内でも職員や園児は帽子をかぶる、園児はお昼寝時でも上靴を履いたまま眠る、非常食や飲料等の避難具は玄関に置く（これは現在も続けています）など、様々な対策をとってこの時期を過ごしました。

あれから1年以上が過ぎ、2017年7月は、福岡県・大分県を中心に九州北部豪雨の災害に見舞われました。想定外の災害が頻繁に起きるようになったと感じています。

以前のことで、東日本大震災で、被災された幼稚園の園長先生に話を窺ったことがあります。

「園児は、訓練のように動けない」

それ以来、年2回行う津波の避難訓練などでは、体調不良児を想定した訓練も始めました。

2017年に告示された改定『保育所保育指針』では「災害への備え」が新たに明記されましたが、想定外の災害が起きた時、私たちは子どもたちをいかに守るのか、それが今大きく問われていると感じています。

最後に、熊本大分地震、そして九州北部豪雨、また近年各地に起こった災害で被害に遭われた方々に、本稿を通じ、心からお見舞い申し上げます。

●Profile

吉田 茂（よしだ しげる）

ふたば保育園 園長／別府溝部学園短期大学 特任教授

1965年に創立し、大分市中心部の自然豊かで閑静な地にある当園。その園長として、子どもたちが自由感をもち、自ら遊びを選び、遊び込める保育を目指し奮闘中。

最近の研究テーマは「言葉の指導法」、「保育ソーシャルワーク」など。